# 「北限大地」の前代話

林　常　夫

皆さんの現代話から連想して半世紀、それより二、三十年さかのぼった小昔を書いて参考に供したい。

私は道・林務官として実査したのは明治末から大正・昭和の初めにかけてだから、平均して半世紀といえるが、いまよりは原始の匂いが残っており、北日本海、オホーツク海からの海風に烈しく吹きまくられる平野、それは道内の他の大平原、湿原とは他国のように立地条件や自然風物が異なりむしろ沿海州、カラフトとのほうが近縁じゃあるまいかとの印象が、いまだにぬけきらない。

これは私の小先入観を弄するようであるが、世人は「北海道」と一口に概括論をする癖もあるから、あえて一言したい。すなわち本道はスイスの国の二倍もある大嶋で周囲には暖寒海流の影響が顕著で、内陸と沿海地方、また南方、北部地域では、他国のように立地条件が異なる。すなわち「北限大地」は、開拓上まったく別天地であることを認識してかかる必要があると思う。

**。天塩、幌延原野の原始林時代**

アカエゾマツに特に「天塩松」の名日本のように風と雨の多い国は、天下に稀れである。私の小専門は常風（台風でなく）と林木の風衝生態研究、つまり防風林原論のようなものであるが、その調査時代に知ったことは、羽幌測候所（留萌を併せて）の風の観測因子、すなわち風よけの船着場、市街地での風当りは、日本海に暴露して風当りの猛烈な場所とは大変な相違で天塩沿海国鉄建設後に、その脅威の大変なのに驚ろいた事実から、この大平原が、想像以上の強風威圧下にあることを知らねばならぬ。

しかして風圧下の原始林は次述のごとくアカエゾマツ、トドマツの純林型で、局部的ではあるが、現に天塩川下流に相当厚いツンドラ地帯も存在し（戦後パルプ原料などと騒がれた）、一大純寒帯湿原であったようである。それで、私は北沿海州と親類感をさえもったのである。

私が踏査した明治四十二年には、そのアカエゾマツの大原始林は濫伐され終り、荒漠たる原野で、今日盆栽として珍重されている萎生のシンコマツ（アカエゾマツの別名）が生き残るだけであった。

しかし、その時分に生きていた先輩の実話では、明治二十年くらいまで前にもどるが、実に見はるかすアカエゾマツの美林で本道材で第一番目に大量に伐り出されたのはこれで、三井物産会社が天塩川口や沿岸で船積みして内地市場に出して人気を拍し特に「天塩松」という名柄ができて、ついに浜松市でヴァイオリンの胴、その他楽器用として盛名を拍して今日の貴重材となったのである。それで、この地の前代話は証明されたと思う。

**。猿払原野の想定**

今度は東側のオホーツク海沿いのほうだが、このほうは夏も、真冬も、早春も歩いてはいるが、時代が大正以降で原始林時代の想定に困難がある。だが、その原始林の破壊されたのは、西側幌延湿原よりは後年だと思うのは次述のごとくであるが、猿払

湿原にはこれまた特異性がある。

それはオホーツク海に東流する各河川の川口が冬季、凍結（方言では川口がクワルという）する全川水が融雪とともに雪原の下で氾濫し、早春には一時南北に長い大平原が臨時の湖水と化し、鷗が群をなして飛び交う奇観を呈し、浜と奥の山林との交通は一時杜絶の形となった（いまは住民が繁殖して、人工で川口の凍結を切り開く）。

この湿原にもアカエゾマツの原始林群は西側に似て存在したとは思うが、われわれが見た頃は、トドマツ群のみが特にその概観であった。しかしながら、この地方の森林利源が豊かであったことは次の事実から断定できる。

それは宗谷鉄道本線の予定は西廻り、すなわち、幌延平野の近道通過が本筋のはずなのに、明治四十二年かに天塩中川郡オトイネップ駅から突然東折して頓別に出て、猿払廻りで稚内につながった。これが貴族院で問題になり、石原長官が迷惑されたということを小耳にはさんでいた。

その後、調べてみると名前は略するが、その沿線には五千町歩、一万町歩という牧場名儀の大森林所有者が軒を並べてあったもので、なるほどとは思うが、その利権森林に、アカエゾマツがたくさんあったという。西側のような実話は伝聞していない。

しかし、当時トドマツは製紙原料としてのほかは、木材として人気のなかった時代だから、アカエゾマツもたくさんあったと想像して間違いはあるまい。

しかもその後人口が少なく、消人のない野火に焼かれて、原生花園と化したのが今日の帰趣ではあるまいか。

**。宗谷方面は想像できない。**

この方面は稚内が北方の要津で昔から海路の交通が開け、漁業の歴史も古く、したがって原始林破壊の史実も遠いと思う。私としては昭和になってから利尻、礼文両島の国有林関係でしばしば通過はしたが、その宗谷本土の原始林型などは到底想像ができない。ただ一つ疑問を抱くのは、稚内裏山をはじめ、自然林が一度山火にかかると自然生林木の回復が遅く、人工造林も成績が面白くなかったという古い体験である。

私の現役時代には、北見紋別郡以南、天塩南部では、針葉樹林が焼けてもその跡にはシラカバ、ヤマナラシ、その他の天然更新による復興林にたすけられたものであるが、この北限大地ではそれが困難であったことの先入感を持つ。いまは若い方の努力で人工造林など、着々成功しておられかしと希うている。

**。北限大地の未来話**

大まかな前代話はこのへんでおわる。しかし、近年は自分で踏査しないから未来話は書けないが、いままで読んだこの地方の開拓報文中に、全道的にも問題である斜面開墾と、そのエロージョンによる貧農地化のことが気にかかる。

日本農民の得意な伝統、石垣による段々畑は、概して石の少ない本道では元来不可能である。だから、自然と山岳大斜面の開墾が流行する。たとえば、石狩河の水害問題のくり返しも、元来両岸の平原は原始時代から出水時の遊水区域で（北限大地湿原も同様）あるのを、今日これを耕地化したものであるが、周囲の山岳部が大きな斜面開墾地と化したから、原始林時代よりは遥かに降雨時の出水時間が急速になり、洪水化することは説明を要しない。「洪水は水源森林の濫伐による」などの説明よりはもっと手近な事実である。

この点は米国と概して国情が似ている。古来、彼国の元住民インディアンは焼畑農業の伝統を有し、山岳斜面を焼き払い、天然肥料の持続する間は斜面耕作をやり、次々に移転した。本道同様に石のない国土であり、段々畑の習慣もないから（その点、北鮮、南満州長白山脈山村民も常習）エロージョンになやまされ、政府は斜面に直角即水平畝を励行（本道では平気で順勾配、上下に畝を作る）そのほかいろいろ細かい指導もしたが、ついに国営でミシシッピー河流域テネシーバレーに一大地域を選び、国営で模範的な治水、理水、電化によって理想的な農、林、工業の適地適業の見本地帯の創作を完遂し、わが国にも戦後に有名になっていた。よって、私はこの地の視察報文をあさってみたが、電気に関するものはあるが、農林関係は見当たらないのは遺憾である。

本州以南のわが国の石垣応用の段々畑は次第に果樹園化しつつある。石の少ない本道ではそれも不可能であり、殊に「北限大地」のような苛酷な立地条件では、大戦後山の手奥地移民にずいぶん不成績のようでこの点について防風林の再建とともに、この降雨出水ごとに起こるエロージョン問題は先決条件のように思う。

この地方では、洋上の美しい離島の眺望と、足元の淋しい原生花園に詩情がわき、宗谷の浜にはメノーやジャスパーなど宝の砂利も沖から打ちあげられ、一応、観光の資は備わるが、筆者のごとき明治人には、なんとしても雄渾なアカエゾマツ原始林景観の昔が偲ばれる。

（北海道林業会館・理事長）